

国語科学習指導案

八尾市立八尾小学校

指導者 松本 美枝子

1. 日 時 令和6年5月30日 第5時限 13:45~14:30
2. 場 所 第6学年1組教室
3. 学 年 ・ 組 第6学年1組(37名)
4. 単 元 名 「主張と事例の関係をとらえ、自分の考えを伝え合おう」
教材文:「時計の時間と心の時間」一川 誠(光村図書)

5. 単 元 目 標

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
・原因と結果など情報と情報との関係について理解することができる。 【(2)ア】 ・文章の構成や展開、文章の種類とその特徴について理解することができる。 【(1)カ】	・事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができる。 【C 読むこと(1)ア】 ・文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる。 【C 読むこと(1)オ】	・言葉がもつよさを認識するとともに、進んで読書をし、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。

6. 本単元で取り組む言語活動

【選択】・筆者に意見文を書こう ・学習レポートを書こう ・作品に対する批評文を書こう 等

7. 単 元 の 評 価 規 準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①文章の構成や展開、文章の種類とその特徴について理解している。 ②原因と結果など情報と情報との関係について理解している。	①「読むこと」において、事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握している。 ②「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめている。	・粘り強く筆者の主張と事例の関係をとらえながら読み、学習の見通しをもって、クリティカルな視点を意識し意見文等を書こうとしている。

8. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級の児童は、国語科の学習において本校の取り組みでもある言語活動を設定した単元デザインの中で「書くために読む、読んだことを書く」ということが定着してきている。本校の国語の研究も今年で6年目であると同時に、本学年の児童も研究教科に国語を据えたなかで、学習を積み重ねてきた。そのため、文学的文章においては、「題名」は人の名前なのか、キーアイテムやキーワードなのか、山場はどこで中心人物は誰でどう変わったのか等、初発の段階で自ら考えて読めている児童が少なくない。それは説明的文章の場合でも同じである。「初め・中・終わり」はどこで、「筆者の主張」は何なのか、各段落のはじめの一文は大切である等、これまで学習してきたことを積み上げることができている。また、文章を書くということに対しても抵抗感がなく取り組んでいる。その証拠に、前学年5年最後の文学的文章の「大造じいさんとガン」の魅力を伝える文を書こうという言語活動を行った際、字数制限を設けた。これは複数の条件を満たしながら文章を書くという課題に対する取り組みでもある。その言語活動中にも割とすぐに字数を満たすことができていた。次のステップとしては文章の推敲である。これについては、どこを削り、どのようにまとめれば自分の考えが伝わるかということを考えなければならない。

読むことや書くことがある程度できている。しかし「国語が好きか」と聞かれると、そうでもない児童が3割程度いる。その原因のひとつは、これまでの学習が一斉に課題解決するもので、初発で抱いた自分の問いを解決できる課題になっていなかったのかもしれない。自分が「知りたい！考えたい！やってみたい！」と楽しみながら、取り組める授業を構築していきたい。

これまでの学習では、教材文と対話し、友だちと対話し、自分と対話しながら学習を進めることができるよう場の設定を行ってきた。その意図としては、自分が知りたいことを追求する中で、同じ疑問をもつ仲間を見つけて対話し、解決に向かってほしいという思いがあった。しかし、その一方で児童はいつもの仲が良い友だちと一緒に課題に向かう安心感が大きく、なかなか学習における友だちの輪を広げることが難しい児童がいる。また、本学年の実態として、国語科における授業の進み方が一部の児童が進め、その児童に任せて自分で考えることが少ない児童もいる。それを打開したく、今年度は、どの学級においてもグループ学習を行いやすいよう机の配置を工夫した。この配置の意図としては、どの教科においてもわからないことはすぐに聞ける。また、友だちのわからないに気付きやすい。気づいたことを呟くと、反応できる。自然と対話する場を増やしたいという思いからである。こうすることでいつもの仲が良い友だちではない児童との対話の中で、学びが広がることを実感できればと願っている。また、本単元の学習の結果、教科書に記載されている本文が完成されたベストなものだとするのではなく、自分の経験も織り交ぜながら批判的に考える視点を身につけさせたい。

(2) 教材観

本教材は、「二つの時間」について説き、「時間との上手な付き合い方」を考えさせる文章である。6年生の中には、毎日慌ただしさを感じたり、その中で不安や不満を感じたりする児童も多い。本教材は、そのような児童の不安を和らげると同時に、客観性も身につけさせる。さらには、練習教材「笑うから楽しい」と同様、日々を前向きに生活する態度を養うことのできる教材であると考えている。

本単元は、筆者の主張と事例の関係を捉える力を育むことをねらいとしている。「自分の経験を踏まえながら考えを交流する」という活動が自然と行えるのではないかと考える。その活動を通して、主張を支える事例を

挙げることにどんな効果があるのか、その理解をより深めていく。

系統的な位置付けとしては、第4学年で「考えと例」、第5学年で「原因と結果」など、情報と情報との関係の学習を積み重ねてきている。本単元では、筆者の主張と事例の関係に着目し理解すると同時に、自分の知識や経験と関連させながら読むことをねらいとしている。

第5学年で学習した説明文「想像力のスイッチを入れよう」などでは、事例の後にその解説がある、細かな中まとめがあるなど読み手が事例と主張を結び付けやすいような文章構成になっていた。本教材では、第3段落から第6段落まで事例を並べて書かれており、事例を読みながら自身の経験と比べて読めるような文章構成になっている。誰もが経験しうる「心の時間」の感じ方の違いを事例としてあげ、その場でできるような実験を読み手に紹介することで、読み手自身の経験や体験につなげやすくなっている。そして、自分の経験と比較することで筆者の事例の選定の理由や主張を捉えやすくなっている。自身の経験を基に文章を読んでいく力は、情報を関係付ける力が必要となってくる中学に向けて、必要となってくる力である。本単元を学習することで、文章をより身近なものとして捉え、自身の経験・知識を関係づけて読むことができるようになると思う。

その一方で、第5段落で挙げられる事例3つ目に関しては、読み手の経験や体験と結びつけることが難しく、納得できない児童が多いのではないかと考えられる。実験の結果としては理解できるが、考察として挙げられている例が結果と結びつけることが難しいということである。この点が、児童がひっかかると予想される箇所であると考え。その例を書きかえることによって、筆者の主張を支える事例がより有効なものになるなど考えを深めたい。

また、事例の順序についても児童の「どうしてだろう」がうまれるのではないかと考える。それは、事例1から事例3にかけて児童にとって納得しやすいものから納得しにくいものになっている。そして事例4で再び納得しやすいものがあげられている。単純に並べ替えた方が分かりやすいとするのではなく、筆者の意図（「心の時間」の特性の類が違う）を考えた上で筆者の主張を支える事例の順の考え、深めたい。

本教材の特徴の一つとして「科学的で確かな事実」を挙げる工夫がある。第4、5段落では、実験①・②の結果を図表と併せて示すことで、説得力を出そうとしている。実験は、どちらも「目的→方法→結果→考察→具体化」という順序で、整然と解説されている。また、第6段落では、読み手を簡単な実験に誘いながら、専門的な実験や研究の成果と伝えている。いずれも認知心理学の専門的な実験に基づいた事実であり、強い説得力につながっている。

(3)指導観

前述した児童観にもあるように、これまでの学習の延長線上に本単元があると考えている。5年で「言葉の意味がわかること」で批評文。「固有種が教えてくれたこと」で意見文。「想像力のスイッチをいれよう」で学習レポートを書いてきた。練習文「笑うから楽しい」の学習に入る前に、これまでの説明文でどのようなことを学んできたのか、また説明文は何のためにあるのか等、十分に想起させる時間を設けたい。この時間が、初発の感想からの問いづくりの視点、言語活動に繋がる大切な時間であると考え。その補助となるように、各単元での学習内容や言語活動をふり返ることができるよう、フィッシュボーン図を使って作成した。ただふり返るだけでなく、図にし視覚的に支援することで、後の第二次の活動においても学習のヒントにもなりえると

考える。

第一次では、題名読みから入る。「楽しいから笑う」のではなく、「笑うから楽しい」という違和感を持たせることによって、後に筆者の主張を捉えやすくなると考える。また、いきなり教材文を提示するのではなく、初めと終わりの第1、4段落のみを提示する。そして、筆者が伝えたいことに納得するか納得しないかを考える時間を設ける。その意図としては、納得できる児童にとっては、自然と自身の経験と重ねることができているから納得できるのであろう。しかし、自身の経験にない児童にとっては共感できない。納得できないということになる。読者の誰しもが納得できるような客観的な事例が必要ということに気づくことが第二次の教材文にも繋がると考える。また最後にもう一度、題名についてふれたい。なぜ、教材文にも使われていた言葉「泣くから悲しい」ではなく、「笑うから楽しい」のか。これは最後の一文、筆者の呼びかけにもあるように、読者に日々を前向きに過ごしてほしいというメッセージにも通ずる。そして、第二次の教材文の最後の一文にもつながると考える。

第二次では、自分が抱いた問いを基に、学習課題を設定していく。前年度までは、一斉に構成面の順序（筆者の主張の位置）や、事例の順序、事例の内容等考え、同じ言語活動を行ってきた。今年度は、その土台の上に、自分で知りたいことを、やりたい方法で学べるようにしていく。その際に、自身の経験や知識と関連付けて考えるように促し、そこから自分は筆者の事例の挙げ方や内容、主張に対する考えを持たせていく。自身の経験や知識と比較し、筆者の事例を考えることは自分の意見を持ちにくい児童にとっても考える入り口となると思われる。また児童にとってその事例が経験と合わず、分かりにくいのであれば、自分にとってより分かりやすい事例に置き換え筆者の主張に迫っていくこともできる。しかし、経験ベースばかりで「私にとって分かりやすい」ばかりに目を向けないよう気をつける。筆者の意図であったり、一般化するなら「みんな（6年生）にとって分かりやすい」のは何なのか等、整理することは必要である。

個別の取り組みで懸念されることは、各々がそれぞれのやり方でするのでまとまりにくいのではないかとということ、言語活動が違うのであれば評価も一定にならないのではないかとということが考えられる。しかし、あくまで説明文は筆者が読者に伝えたいこと（主張）を事例や資料を使って説明している文であるということ。その主張を支えるための本文が本当にこれがベストなのか等を念頭においておくことが大切である。そのうえで誰に対して書くのかという相手意識、またなぜその言語活動にしたのかという目的意識を共通してもつことによって、一定の評価はできると考える。そうすることで、軌跡が違っても向かうゴールは同じであれば、十分に単元目標に到達できるのではないかと考える。また、言語活動についても、うまくいかないことも考えられる。友だちの方法の方が良かったという結果になることもあるだろう。そのことを振り返ることが大切ではないかと考える。そのため、第三次で言語活動をやって終わりではなく、ゴールをお互い確かめ合う時間も設定するようにする。

9. 単元の指導と評価の計画（全11時間）◎…記録に残す評価 ○…指導に生かす評価

次	時	主な学習活動	知技	思判表	主体	評価規準・評価方法
1	4	・「笑うから楽しい」の全文を通読し、双括型の文章の特徴	○	○		

		を押さえ、筆者の主張とそのための事例を読み取る。 ・「笑うから楽しい」の中で、納得したことを理由とともに話し合う。 ・「時計の時間と心の時間」を題名読み、通読、初発の感想を書く。 ・初発の感想を共有し、問いをもつ。【本時】		○		
2	4	・問いに対して自分の考えをまとめる。(協働) - 内容面、構成面、筆者の主張に対して ・考えを交流し、自分の考えに加筆修正を行う。	○	○		・学習したことを基に、自分の考えをまとめている。 【思・判・表】①②〈ノート〉
3	3	・言語活動を選択し、学んだことや自分の考えを書く。 ・言語活動の成果物を交流し、単元をふりかえる。	◎	◎	◎	・クリティカルな視点を意識し意見文等を書こうとしている。 【知・技】② 【思・判・表】①②〈ノート〉 【主】〈態度〉

10. 本時の展開(4/11 時間目)

(1) 本時の目標

- ・「時計の時間と心の時間」を読んで抱いた問いを基に、学習課題を設定し、学習計画を立てることができる。
- 【主体的に学習に取り組む態度】**

(2) 本時の評価規準

- ・「時計の時間と心の時間」を読んで抱いた問いを基に、学習課題を設定し、学習計画を立てようとしている。

(3) 展開

主な学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
1. 前時の学習をふりかえる。		
2. 本時のめあてをつかむ。		
自分たちの問いから学習の作戦会議をしよう！		
3. 初発の感想を交流する。	・筆者の主張をおさえる。 ・板書に意見をまとめる際、上段には初発の感想からの気づき等、下段には作戦につながる気づき等を書く。 ・考えたいポイントについて、ゆさぶりをかける。	
4. 今後の学習の作戦を考える。	作戦例 ① 構成（事例の順序に着目） ② 内容（事例の分かりやすいランキング→書きかえる） ③ 主張（最後の一文を自分の言葉で）	
5. 本時をふりかえり、次時につなげる。	・自分は、どの学習方法で、どのように進めるのかをまとめる。	主体的にと学習に取り組む態度 （行動観察・ノート） 【記録に残す評価】

訂正版(R6.5.29)

本時における具体的な児童の状況 0

おおむね満足できる状況(B)	努力を要する状況(C)への支援
本文を読んで問いを抱くことができる。 かつ、学習課題を設定することができる。	これまで学習してきた経験をまとめた図を提示し、学習の見通しを持てるよう促す。

(資料)

言葉の意味が分かること

筆者の主張

①筆者の主張
・言葉の意味を「語」として理解することが大切
・言葉の意味を「語」として考えることは、普段使っ
ている言葉や、ものの見方を整理することにもつなが
る

②納得（共感）できるか

③要旨

①文章構成
はじめ、中、終わり

②〇〇型 双括型

構成

事例の内容

①わかりやすいか
「コップ」○ 「かむ」と「ふむ」○
「食べる」「飲む」×
「持つ」「かかえる」「せおう」△

②書きかえよう！
「食べる・飲む」を他の事例で考
える 【視点】筆者

③比較 自分のものと友だち
自分たちのものと筆者

①②順序は適切か
不適切であれば並べ変えてみる
【視点】筆者

①②筆者の意図（どのような順か）
小さい子に身近なもの→
私たち（学習者）に近しいもの

③比較 自分のものと友だち
自分たちのものと筆者

事例の順序

単元ゴール：
学習レポートを書こう
【視点】読者

言葉の意味が分かること

書きぶりの工夫

①どのような工夫があるのか
これまで説明文との比較

②事例の工夫「原因と結果」
原因→結果を示すことで説得力が
増す。

例「原因と結果」
原因：自分が読んだ言葉を、別の場面で使おうと
してうまくいかなかった。
結果：言葉の意味のはんいを広げて使いました。

①筆者の考え方や、事例の示し方
に対して
共感・納得？それとも疑問？

②自分の生活の中で同じよう
な経験はあるか

自分の考え

単元ゴール：
学習レポートを書こう
【視点】読者

固有種が教えてくれること

準備

①筆者を知る
今泉忠明さんって？
「ざんねんな生きものシリーズ」

②資料なし本文
→わかりにくい！

③どのような資料が必要か考
える

①文章構成
はじめ、中、終わり

②〇〇型 双括型

構成

資料

①筆者の主張を支えるために必
要な資料を考える【視点】筆者

②比較 友だち

③比較 筆者

①筆者の主張
国を離れず日本での生活でできる限り残していかなけれ
ばなりません。
それが、自然にふさわしい私たちの責任なのではないで
しょうか。

②納得（共感）できるか

③要旨

筆者の主張

単元ゴール：
統計資料を用いて
意見文を書こう
【視点】筆者

固有種が教えてくれること

書きぶりの工夫

資料活用の効果
図表やグラフ、写真

筆者の主張
「残していきたいと考えている」→「責任」
中の説明を通して主張が強くなっている

①自分の考えをもつ

②考えを支える資料を選ぶ

③順序を考え書く

意見文を書く

単元ゴール：
統計資料を用いて
意見文を書こう
【視点】筆者

想像力のスイッチを入れよう

準備

①題名から予想

②事例から内容を予想する

①文章構成
はじめ、中、終わり

②〇〇型 尾括型

事例の順序

構成

事例の内容

①4つの事例を比較

②重要な事例ランキング

③4つの事例のうちサブタイトル
をつけるならどれがふさわしいか

①筆者の主張
あなたの努力「想像力のスイッチ」を入れる
こと。自分の想像力でかべを破り、大きな景
色をながめて判断できる人間になってほしい。

②最後の比喩表現の一文がよ
くわからない

③最後の一文を自分の言葉で
書く。

筆者の主張

単元ゴール：
学習レポートを書こう
（学んだことの他に自分の
経験とスイッチと絡ませて）

想像力のスイッチを入れよう

書きぶりの工夫

①どのような工夫があるのか
これまで説明文との比較

②事例の工夫「事例と筆者の意見」
事例→意見を示すことで説得力が増
す。

例「事例と意見」
事例：マラソン大会の例
意見：同じ出来事でも、何を大事と思うか
で、発信する内容はちがってくる。

①4つの事例のうち一つを選
ぶ

②これまでの経験でスイッチを入
れてうまくいったこと、スイッチを入
れずにうまくいかなかったこと等

自分の考え

単元ゴール：
学習レポートを書こう
（学んだことの他に自分の
経験とスイッチと絡ませて）